

大角 雄三

大角雄三設計室

【作品名】
玉野の家

設計 大角雄三設計室
施工 有限会社 住まいの伏見
竣工日 2019年4月1日

◎建物概要

建設地 岡山県玉野市 延床面積 100.98㎡
敷地面積 259.76㎡ 構造・規模 木造平屋建

◎設備面の特記

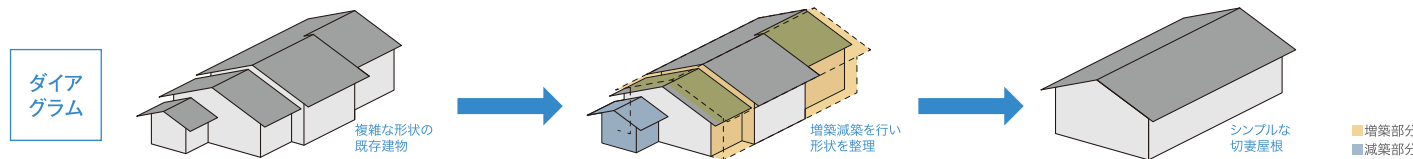
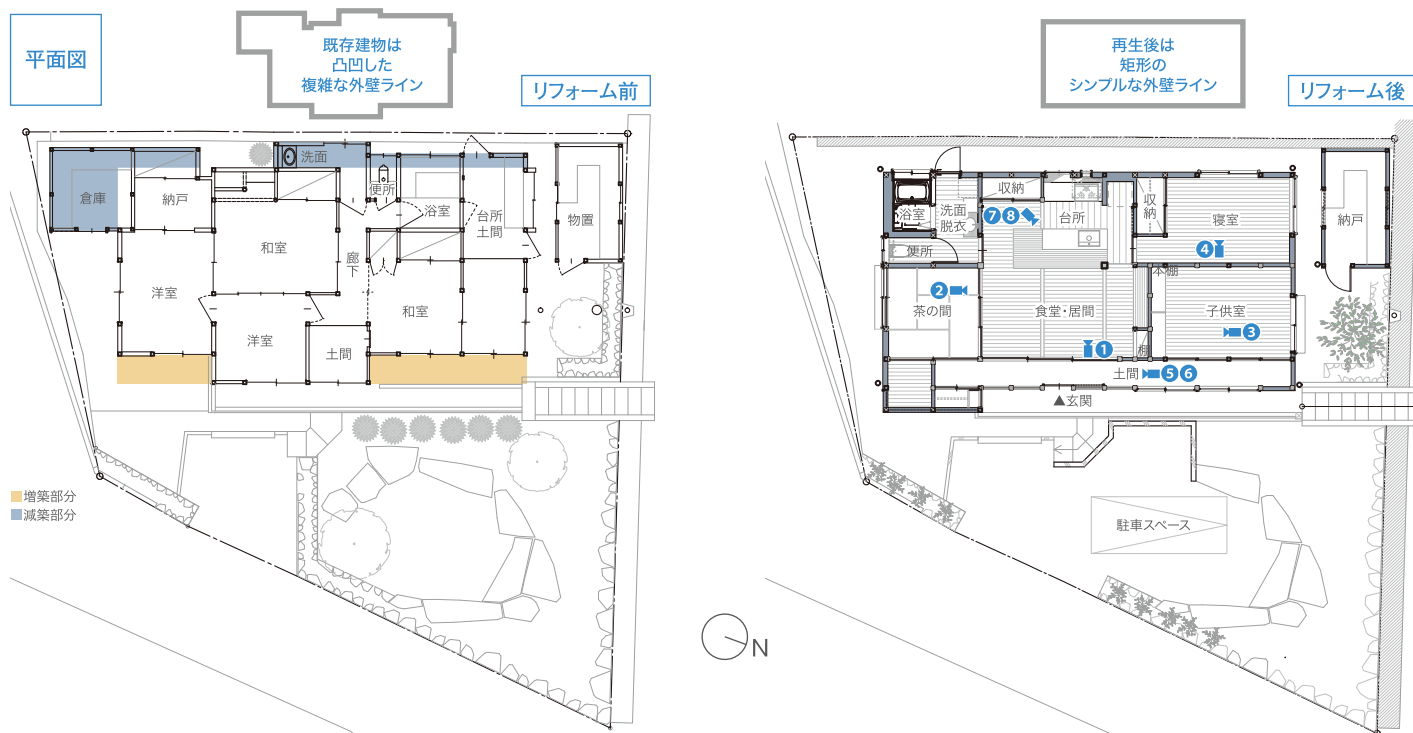
厨房機器	ガスコンロ
給湯機器	ガス給湯器
冷暖房機器	エアコン



before



after



設計コンセプト

敷地は、岡山県玉野市の昭和30年代から60年代にかけて造成した団地の一角。団地全体はかなり老朽化しており、空き家や空き地が点在しています。一方で、地域としては瀬戸内芸術祭の玄関口である宇野港があり、港町を形成してきた民家やアートが混在した活気ある町です。
建主は夫婦と子どもの良い3人家族。子どもの成長を思い一戸建てに住むことを決断し、色々探した結果購入された建物は、昭和30年代半ばの高度経済成長期に建てられた建売の供給住宅でした。高度経済成長期には地方にも住宅難の波が押し寄せ、官民合同で無数の住宅が供給されました。その多くが現在老朽化し、直す価値もないと放置されたり解体を待つ状況であり、今回の建物もその一つでした。しかしこじんまりした平屋を気に入った建主が、この建物の再生を強く望まれました。

既存建物はバラックのように増改築を繰り返し、多数の棟を持つ複雑な形状でした。今回私たちは一つの棟の切妻屋根と矩形のプランになるように整理しようと考え、それに伴い一度軸組みまで解体し、建物の中心に位置する居間部分に大断面材でフレームを組み、建物全体を補強する構造としました。
広くはない家なので、暮らしのシーンに呼応して空間が転用する計画を心掛けた。例えば東側前面を土間の縁側とし、建具を開け閉めすることにより色々な使い方ができるようにしています。家を直す価値とは、文化的な価値や資産的な価値と同義で勘定されますが、建築家としてはただ建物をつぶさに読み解き形式を踏襲しながら丁寧な仕事をする事で、「60年前からありそうで60年後にも新しい建物」を目指しました。
建主にはこの地域に昔からあったようにさりげない佇まいと、しかもどこか新しいと感じる建物を喜んでいただいています。

審査委員講評

築60年、高度経済成長期に建てられた住宅を再生したいという施主の強い要望に見事に応えています。築100年、150年の古民家の再生のような「歴史的建物を未来に遺す」といった使命感とはまた別の「建売住宅を再生する」ことに建築家が挑んだ作品です。現代の基準を満たす構造補強やシンプルな間取りへの変更など、地味ながら高度な知識を必要とする作業の積み重ねが次の60年の暮らしを愉しみます。



1



2



3



4

①②③④オープン棚は余剰収納ではなく、メインの収納として機能。きれいに住むのではなく楽しく住むことを重視している。
⑤⑥建物の採光面を東側にとり、ガラス張りとした。道路に面していることもあり、障子で居室や子ども室と土間を区切り、プライバシーを確保すると同時に可動的なダブルスキンとして機能。障子を開け放つと縁側のように開かれた空間となる。



5



6



7



8

⑦この家ではカーテンを設けていない。視線や光を和らげるものには障子やポリカーボネイトなどの建具を用いている。外に開くことが難しい中、外と仕切っていても気持ちいいのはやはり障子だと再認識する。
⑧初めから新築を望んでいなかった建主一家。古民家や大きい家など資産価値のあるものではなく、小規模のものを探すうちにこの物件にたどり着いた。昔からあったようなさりげない佇まいとどこか新しいと感じられる建物を喜んでいただいている。